

Prufrock and Other Observations における女性の 描写

古賀, 元章
福岡教育大学 : 教授

<https://doi.org/10.15017/18500>

出版情報 : *Comparatio*. 13, pp.5-15, 2009-12-20. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

Prufrock and Other Observations における女性の描写

古賀元章

はじめに

女性が詩の中で表現されるのは取り立てて目新しいわけではない。男女を問わず、一般の読者に注目されるのは、どのような女性がどのように描写されているかであろう。20世紀を代表する詩人 T. S. Eliot (1888–1965) は自らの詩の中で、女性の描写をどのように表現しているのだろうか。この点については、国内外の研究者の間で十分に論述されていないように思われる。

エリオットの第一詩集 *Prufrock and Other Observations* (1917) の中から選んだ7編の詩における女性の描写を検討すると、語り手のさまざまな女性観（魅力、嫌悪、恐怖、憐憫の情）が明らかになる。この女性観を彼の詩の表現内容と結びつけてみると、そこから浮かび上がってくるのは詩人自身の女性観である。そこで、本稿が第一詩集の女性の描写に注意を払って指摘したいのは、エリオットが読者に語り手の内面葛藤を理解させながら、同時に自らの内面葛藤に向き合っていることである。

1. 1910–11年の詩

エリオットの第一詩集の最初に記載されている “The Love Song of J. Alfred Prufrock” (1910–11) の女性の描写から考察してみることにする。この詩の冒頭は次のように書かれている。

Let us go then, you and I,
When the evening is spread out against the sky (13)¹

この詩の題名からわかるように、“T” は語り手の J. アルフレッド・プルーフロックであり、テーマはこの語り手の恋歌である。1行目の “then” から判断すると、彼は “you” と何かを話題にした後、この人物と夕暮れにどこかに行こうとする。その行き先は、“In the room the women come and go / Talking of Michelangelo.” (13) と表現されている。

しかし、プルーフロックは客間の婦人たちを妙に意識して、時間をしきりに気にしたり、薄くなった髪の毛や細くなった手足を相手から冷笑されるのではないかと思案したりする。

結局、この詩はプルーフロックの狐疑逡巡だけを伝えている。その一端を描く次の詩行を引用してみよう。

And I have known the eyes already, known them all—

The eyes that fix you in a formulated phrase,
And when I am formulated, sprawling on a pin,
When I am pinned and wriggling on the wall,
Then how I should I begin
To spit out all the butt-ends of my days and ways?
And how should I presume? (14-15)

彼は、芸術を話題にする婦人たちの目や上品な言葉に引きつけられて、彼女たちへの恋のとりこになってしまう。しかし、彼は婦人たちにこの自分の気持ちを述べることができないでいる。ところが、自虐的な発言や彼女たちへの接近の自重はかえって、彼の実らぬ恋を浮き彫りにしてしまう。

ところで、プルーロックの同伴者“you”は一体誰であろうか。エリオットが Kristian Smidt に出した手紙によれば、この人物は友人か仲間、たぶん男性であると書いている (Smidt 85)。彼の手紙の内容を文字通り受け取るならば、この詩は語り手が恋愛の相手を求めて男性を連れ立ち、婦人たちの部屋へ行くという場面設定になる。しかし、同伴者については、エリオットの説明のほかに、さまざまな人物像が浮かび上がってくるであろう。それは、プルーロックの恋の相手でもあるし、彼の分身でもあるし、彼の言動を追体験する一般の読者でもある。その上、彼の恋の相手は、イタリアの彫刻家・画家・建築家ミケランジェロ (1475-1564) を話していた婦人たちの一人であるかもしれない。²

この詩のエピグラフとなっているのは、中世イタリアの詩人 Dante Alighieri (1265-1321) が著した *Divine Comedy* の *Inferno* 27: 61-66 である。“you”の曖昧な描写を検討するために、このエピグラフを引用してみよう。

*S'io credessi che mia risposta fosse
a persona che mai tornasse al mondo,
questa fiamma staria senza più scosse.
Ma per ciò che giammai di questo fondo
non tornò vivo alcun, s'i'odo il vero,
senza tema d'infamia ti rispondo.* (13)

もし私の返事が現世へ戻るような人の耳に
かりそめにもはいるなら、
この炎はたちまちにゆすらぎを止めるだろう、
だがこの底からはかつて誰 1 人
生きて帰った人はいないという、それが事実なら、
汚名を残す心配もない、君の質問に答えよう。(『神曲』97)

これは、地獄にいる罪人 **Guido da Montefeltro** (1223–98) がダンテをこの世に帰れない同じ住人だと見なして話す光景である。この光景とエリオットの詩を結びつけてみると、ガイドの立場がブルーロックであり、ダンテの立場が “you” である。

そうすると、ブルーロックは、自分とかわりのある人物（男性の知人、恋の相手、彼の分身、男女の読者）に、ガイドと同じく地獄に落ちた住人であることを認識させようとするのである。彼は、ミケランジェロを話す婦人たちの生気のない場面を示して、彼女たちが虚飾に満ちた世界にいることを指摘しようとするのであるが、その一方で彼女たちへの接近をすっかり止めていない。それは、彼が彼女たちの魅力を完全に諦めたわけではないことを意味する。

このような論考から浮かび上がるのは、エリオットの女性観がブルーロックの言動に反映していることである。この点について検討してみたい。

晩年にエリオットは、ブルーロックが 40 歳位の中年男性であるし、同時に自分自身でもあることを話している (“**T. S. Eliot ... An Interview**” 17)。彼が中年男性であることは、薄い髪の毛と細い手足の姿から十分に想像できる。ブルーロックがエリオット自身である場合、“you” の一面は詩人の内面の自己である。エリオットが意識する対象は社交婦人たちである。このことから考えられるのは、彼が子供時代にエリオット家で女性たち（母親、姉たち）に囲まれて過ごしたことである。同家は、祖父 **William Greenleaf Eliot** (1811–87) の遺訓（公共への義務、慈善、立派な仕事）によって支配されていた (**Pritchett** 73)。母親 **Charlotte Champe Eliot** (1843–1929) がこの遺訓を実行して子供たちを教育した。たとえば、子供たちが祖父のことを忘れないように、彼女は 1904 年に回想録 *William Greenleaf Eliot* を出版している。そこでは、彼女の義父（エリオットの祖父）の美しい目の真剣な表情が書かれている (58)。そこで、ブルーロックが意識する「目」は祖父の目や母親の目を暗に指すであろうし、“a formulated phrase” はこの家訓を踏まえた文句であることを暗に指すであろう。父親 **Henry Ware Eliot, Sr.** (1843–1919) は性的本能を忌み嫌って、子供たちを教育した (**Ackroyd** 45)。両親のこうした厳格な躰にエリオットが従順でないことは、ブルーロックが社交婦人たちへ近寄ることをためらったり、性的衝動とその抑制に苦しんだりする言動から読み取ることができよう。

“**Portrait of a Lady**” (1910–11) は、大学生の青年の語りと中年の女性の話し声を描いている。霧の深いある 12 月の午後、青年は彼女の部屋を訪れる。この部屋はほの暗くなっていて、恋を語り合うのにはふさわしい場所を提供している。中年の女性は好意的な態度を示して歓迎するが、彼はイギリスの劇作家 **William Shakespeare** (1564–1616) の *Romeo and Juliet* の女主人公ジュリエットが麻薬を飲んで仮死状態にある墓場³を思い浮かべる。ロメオとジュリエットの実らぬ恋が青年と彼女の間にも感じられてしまう。そうした気まずい雰囲気の中で会話が始めると、彼は “**And so the conversation slips / Among velleities and carefully caught regrets**” (18) と語り、相手へのかすかな興味とここへ来ることへの後悔が入り交じった複雑な気持ちを抱くのである。中年の女性は話し合いとなってくれる友人

が欠かせないことを熱っぽく話す。しかし、青年はこの友情論に嫌気をさして、部屋の外の内容（記念碑、最近の出来事、公共の時計、僕たちの黒ビール）に頭を切り換えて、苛立った神経を鎮める。

ライラックが花咲く4月に、青年は中年の女性を再び訪れる。この花を生けた花瓶のある部屋で、彼女はその一枝をひねって人生論を展開しながら、“the friendship and the sympathy” (20) を求めようとする。彼女の話に巻き込まれないようにするために、彼は日常生活の三面記事（イギリスの伯爵夫人の舞台活躍、ギリシャ人の殺害、もう1人の銀行員の公金横領の自白）に目を向ける。しかし、これらの三面記事の内容を前回の訪問での部屋の外の内容と比べると、今回が中年の女性に対する背信行為を強く感じさせる。

月日が経ったある10月の夕暮れに、海外へ留学する青年は、中年の女性に別れの挨拶にやってくるが、足取りが重く気分もすぐれない。彼女は彼の前途を祝福する穏やかな口調でこの別れ話を受け止める。彼女の思いやりにかえって戸惑い、青年は、熊踊り、おおむの叫び、猿の声が次々と脳裏に浮かんでくる。このような狂乱じみた精神状態から察して、中年の女性への彼の罪悪感がさらに強まっている。

その後、この詩は次のような場面を描いている。

Well! and what if she should die some afternoon,
Afternoon grey and smoky, evening yellow and rose;
Should die and leave me sitting pen in hand
With the smoke coming down above the housetops;
Doubtful, for a while
Not knowing what to feel or if I understand
Or whether wise or foolish, tardy or too soon ... (21)

青年は、中年の女性の突然の死をいろいろと想像して心が乱れ、彼女とのつき合いを海外へ留学する前の出来事として片づけることができないでいる。これは、彼の良心の呵責が思わず吐露された場面であると言える。海外へ留学した後も、彼はこの良心の呵責に苦しめられるであろう。

ハーバード大学の友人 Conrad Aiken (1889–1973) は、エリオットと一緒にボストンのビーコン・ヒル (Beacon Hill) に住む婦人を訪れている。エイケンには、この婦人が“Portrait of a Lady”における中年の女性のモデルであることを指摘している (186)。この詩は、大学生のエリオットがフランスへ遊学した時期に脱稿されたことや、青年が大学に在籍して、海外へ留学することを考えると、エイケンの指摘は十分に納得がいくであろう。

そこで、青年の描写に影を落としている当時のエリオットの姿について探求してみたい。彼はハーバード大学に入学する前、ボストン郊外のミルトン・アカデミー (Milton Academy) に通っている。母親はこの学校の校長に、息子の健康を心配する手紙を出している (end Sept.

1905, *The Letters of T. S. Eliot* 11-12; 20 May 1906, *The Letters of T. S. Eliot* 12)。また、1910年5月にハーバード大学で猩紅熱の疑似患者が出たとき、エリオットも入院させられる。この話を聞いて、彼女は息子の病状を案じて駆けつけている (Ackroyd 40)。こうした母親の過保護的な庇護を受けて育ったエリオットは彼女の存在をたえず意識せざるを得ないのであったと思われる。父親は性的本能を嫌うように息子を育てた。“*velleities and carefully caught regrets*” とつぶやく青年には、この父親の教えが脳裏をかすめるエリオットの姿が反映されているであろう。したがって、中年の女性を訪問するたびに彼女への罪意識を抱く青年の言動は、両親の厳格な教育方針に悩むエリオットの内面葛藤を暗に描き出しているのである。

“*Rhapsody on a Windy Night*” (1911) は、大学生のエリオットが遊学中のパリで書き上げた詩である。ここで次のような光景を見てみよう。

Half-past one,
The street-lamp sputtered,
The street-lamp muttered,
The street-lamp said, ‘Regard that woman
Who hesitates towards you in the light of the door
Which opens on her like a grin.
You see the border of her dress
Is torn and stained with sand,
And you see the corner of her eye
Twists like a crooked pin.’ (24)

この詩の舞台となっているのは、月光が夜中に照らす街路である。1人の男がこの街路を歩いているとき、街灯は彼を呼び止めて語りかける。戸口の開き具合は、女のにやにや笑いに擬人化されて、彼女からの誘惑の表情も象徴する。ドレスが切れ砂で汚れていることや、皺の寄った目じりは、場末に住む娼婦のうらぶれた生活を彷彿させる。

擬人化された街灯は男の内面の自己を表しているし、街灯の言葉は彼の独白を表している。この光景は、異性への興味とそれを止めようとする彼の内面描写を伝えているのである。

エリオットは、オックスフォードのマートン・カレッジ (Merton College) からエイケンに出した1914年12月31日付の手紙の中で、次のように述べている。

Oxford is very pretty, but I don't like to be dead. I don't think I should stay there another year, in any case; but I should not mind being in London, to work at the British Museum. How much more self-conscious one is in a big city! Have you noticed it? Just at present this is an inconvenience, for I have been going through

one of those nervous sexual attacks which I suffer from when alone in a city. Why I had almost none last fall I don't know—this is the worst since Paris. I never have them in the country.... One walks about the street with one's desires, and one's refinement rises up like a wall whenever opportunity approaches. (*The Letters of T. S. Eliot* 74-75)

当時のエリオットは、哲学を勉強するために母校から奨学金をもらって、オックスフォード大学のマートン・カレッジに入学している。この手紙には、今の生活の不便さが書き留められているが、ここで注意を引くのは、この不便さがパリ以来の神経症の性的衝動によるものだという点である。そのパリで書かれた 1911 年の詩は、男の内面描写を介して、異性のことで心が揺れ動くエリオットの姿も暗に描いているのである。男は、戸口に立つ女のそばを通り過ぎて、自分の部屋に帰ることになる。“one's refinement rises up like a wall whenever opportunity approaches.” が示唆するように、両親の厳しい躰による礼儀正しさがエリオットに壁のように立ちはだかっているのである。

“Preludes” (1910–11) の背景は都会の場末である。第一部は冬の夕暮れの退廃的な情景であり、第二部は今日も繰り返される人々の単調な朝の生活である。この朝の情景は語り手に、第三部で次のような女の場面を思い起こさせる。

Sitting along the bed's edge, where
You curled the papers from your hair,
Or clasped the yellow soles of feet
In the palms of both soiled hands. (23)

朝が到来すると、彼女はベッドの端に腰かけて、お決まりの動作をいかにも大儀そうにする。これは、黄ばんだ足の裏や汚れた手の描写から判断して、生きる喜びを見出せないでいる彼女のわびしい生活が繰り返されていることを伝えている。

後に、語り手の胸の内が次のような詩行で描かれている。

I am moved by fancies that are curled
Around these images, and cling:
The notion of some infinitely gentle
Infinitely suffering thing. (23)

彼は場末を観察したり、そこに住む女のわびしい生活を思い浮かべたりした。それらが、こうした場面に見慣れた他人からすれば、“these images” についての “fancies” であると言える。“thing” には、画一された場末の日常生活の中でいわば物体化された「もの」に等しい

住人たちが含まれる。その“thing”を修飾する“some infinitely gentle / Infinitely suffering”は、住人たちの悲惨さばかりではなく、語り手の彼らへの憐憫の情までも示唆している。

このような“Preludes”の表現内容は、エリオットが母親と過ごした子供時代と深く関係しているように思われる。彼の回想によれば、セントルイスの生家の近くは、見苦しくて、活気のない都会の風景で、そのイメージの上にパリやロンドンのイメージが重ねられた(“The Influence Landscape upon the Poet” 421-22)。そこで、生家の近辺の都会の有様が、“Preludes”の場末の情景の原風景になっていると言える。知人 Clara H. Scudder によれば、母親には愛と共感が認識された(“In Memoriam: Mrs. Henry Ware Eliot”)。たとえば、彼女が、貧民救済、保護観察、少年裁判所法などの問題に愛と共感でもって取り組んだことは十分に想像できる。⁴ 少年エリオットは、こうした母親の精力的で真摯な態度を観察していたと考えられる。彼女の愛と共感が心の中にしっかりと植えつけられて、青年エリオットはこの詩の語り手に住人たちへの憐憫の情を抱かせたと言ってよいであろう。

2. 1915年の詩

1915年に書かれた詩の中から3編を取り上げて、女性の描写を考察してみたい。“Morning at the Window”の冒頭は次の通りである。

They are rattling breakfast plates in basement kitchens,
And along the trampled edges of the street
I am aware of the damp souls of housemaids
Sprouting despondently at area gates. (27)

語り手は、女たちが地下室の台所で朝食用の皿を洗っている様子を観察している。街路に目をやり、菌類の発生を引き合いに出して、彼は地下室の勝手口にいる女中たちの生気のない姿を意識している。写実的な描写とグロテスクな描写を組み合わせ、この詩行は荒涼とした都会生活の姿と住人の単調な日々の生活を示唆している。

“The Boston Evening Transcript”は次のような場面を描いている。

When evening quickens faintly in the street,
Wakening the appetites of life in some
And to others bringing the *Boston Evening Transcript*,
I mount the steps and ring the bell, turning
Wearily, as one would turn to nod good-bye to La Rochefoucauld,
If the street were time and he at the end of the street,
And I say, ‘Cousin Harriet, here is the *Boston Evening Transcript*.’ (28)

街で生活する人々にスポットライトが当てられている。夕暮れになると、何かの欲望に駆られる人々もいれば、ボストン夕刊紙を読むのが日課である人々もいる。語り手は、階段を上って呼び鈴を押し、夕刊紙をハリエットおばさんに届ける。読者が思い描くのは、彼女がこの夕刊紙を読んで、お決まりの1日を終えることであろう。そうした日々の暮らしは、街はずれで語り手が出会うかもしれないロシュフコーについても言えそうである。その一方で、何かの欲望を求める人々も、所詮、日々の憂さを紛らわそうとするだけであるように思われる。結局のところ、夕暮れ時の過ごし方の違いこそあれ、毎日を精一杯生きている街の人々が描かれているのである。そのことがハリエットおばさんへの言及から読み取れるであろう。

“Morning at the Window”と“The Boston Evening Transcript”は共に、1910-11年の詩と異なって、直裁のイメージを前面に押し出して、都会の生活風景を伝えようとしている。こうした詩風には、当時のエリオットが勉強していた事実のあり方と深く関係しているように思われる。ハーバード大学大学院に在籍していた1913-14年に、彼は哲学者 Josiah Royce (1855-1916) のセミナー “A Comparative Study of Various Types of Scientific Method” に参加して、論文 “The Interpretation of Primitive Ritual” (1913) を発表している。この論文は、未開人の儀式を取り上げて、事実認識の原点が〈今・ここ〉であると結論づけている。⁵ この考え方が二つの1915年の詩に取り入れられた結果、そこには直裁のイメージの詩的効果が読者に認識されるのである。

加えて、これらの詩にも、母親の影響を受けて、一生懸命に生きている都会の人々へ寄せるエリオットの憐れみの気持ちが反映されているばかりではなく、彼らと共通した生活状況を認識するエリオット自身の姿も認識できよう。なぜなら、イギリスに住んでいた1915年頃の彼は、アメリカの両親から受けた財政の援助では十分でないので、学校の教師をしたり、書評を精力的に行ったりして生活の糧を得ていたからである。

その頃に書かれた散文詩 “Hysteria” の次のような書き出しの文章を見てみよう。

As she laughed I was aware of becoming involved in her laughter and being part of it, until her teeth were only accidental stars with a talent for squad-drill. I was drawn in by short gasp, inhaled at each momentary recovery, lost finally in the dark caverns of her throat, bruised by the ripple of unseen muscles. (32)

詩の題名から判断される彼女のヒステリックな笑いが、語り手に挑発的な態度をとる表情となっている。その笑いに引きつけられて、語り手は短く息づかいする彼女の口の中へどんどん吸い込まれてしまう。彼は、彼女の歯が特別な訓練を受けた分隊のような流れ星に思えて、ついに彼女の暗い喉の奥へと吸い込まれるのである。

ここで、1915年頃のエリオットが直面していた問題⁶に注意を払って、彼の女性観が散文詩にどのように反映されているのを探究してみたい。彼は、1914年にオックスフォード大学マートン・カレッジに入学する。しかし彼は、当地での生活にうまく馴染めず、些細なこと

に悩んでいる (“To Conrad Aiken,” 30 Sept. 1914, *The Letters of T. S. Eliot* 58-59)。第一次世界大戦の重圧でイギリスが好きになれないし、ケンブリッジに戻ることもためらっている (“To Conrad Aiken,” 25 Feb. 1915, *The Letters of T. S. Eliot* 88)。母親は息子がアメリカの大学に就職してくれることを希望している (“To Bertrand Russell,” 23 May 1915, *The Letters of T. S. Eliot* 139)、父親も彼女と同じような考えである (Ackroyd 65)。また、エリオットは 1914 年 9 月 22 日に、エイケンの紹介により、イギリスで文学の改革運動を推進していたアメリカ人の詩人 Ezra Pound (1885-1972) と出会う。彼の影響を受けて、エリオットは文学の仕事をしよと思うようになる (“To James Houghton Woods,” 10 July 1915, *The Letters of T. S. Eliot* 108-09)。

このように、1915 年頃のエリオットが悩んでいたのは、①イギリスに住むべきかアメリカに帰国すべきか、②哲学の研究をすべきか文筆活動をすべきか、③両親の意向に従うべきか自由意志を尊重すべきか、である。そうした時期に、彼がイギリスの女性に注目した。その女性が、彼と 1915 年 6 月 26 日に結婚する Vivienne Haigh-Wood (1888-1947) である。彼は父親に、彼女がこれからの人生に欠かせない女性であることを報告している (23 July 1915, *The Letters of T. S. Eliot* 110-11)。結局、彼がイギリスにとどまって文筆活動に専念するのは、ヴィヴィアンの存在も大きかったと言えよう。

かつてハーバード大学の客員教授をしていたイギリスの哲学者・数学者 Bertrand Russell (1872-1970) は、同国で会った新婚のエリオットについての印象を、“He is ashamed of his marriage, and very grateful if one is kind to her.” (“To Lady Ottoline Morell,” July 1915, Russell 54) と述べている。この印象が示すように、エリオットは新妻の生来の神経異常⁷に気づいていた (Ackroyd 65)。そのため、彼は人生に不安を覚えていたばかりではなく、上述した 3 点の悩みも完全に解決できないでいたと言えよう。

“Hysteria” は 1915 年 11 月の *Catholic Anthology* に初めて発表され、若いカップルの愛を描いている。こうした愛の描写の詩は以前に書かれていないし、エリオットが 1915 年 6 月 26 日に結婚していたことを考えると、この詩は彼の結婚日から発表時期の間に書かれたと判断できよう。そうすると、この詩に登場するヒステリー気味の女性は精神異常のヴィヴィアンをモデルにしているであろう (Miller 48)。男の脳裏に去来する相手への魅力と恐怖には、イギリスで人生への期待と不安を抱くエリオットの屈折した複雑な感情が盛り込まれているように思われる。

おわりに

第一詩集 *Prufrock and Other Observations* の語り手たちの女性観は、要約すると、魅力、嫌悪、恐怖、憐憫の情であった。とはいえ、第一詩集の 1910-11 年の詩と 1915 年の詩とでは、この女性観に変化が見られる。後者の詩のほうが、女性のメージ自体や語り手の自虐を強調していた。それは、エリオットが 1913 年のセミナーで事実認識の出発点を〈今・ここ〉と考えたり、1915 年にイギリス人のヴィヴィアンと結婚したりしたことと深く関係があ

った。そうすると、1915年の詩に見られる女性の描写は、4年後に詩そのものを第一義的に評価の対象にすべきであると主張するエリオットの詩論 (“Tradition and the Individual Talent” 53, 59) の土台となっているのである。その主張には、他人から詮索されずに、個人的な感情と向き合おうとする彼の姿があることも看過すべきではないであろう。

注

1. エリオットの詩からの引用はすべて *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* による。括弧内の数字はこの作品全集の頁を表す。
2. “you” のさまざまな解釈については、拙著『T. S. エリオットの詩の研究』26を参照。
3. *Romeo and Juliet* 786-90を参照。
4. この点については、拙論「T. S. エリオットのエリート論と母親の優生思想」を参照。
5. この点については、拙論「T. S. エリオットの事実論についての序説」を参照。
6. この点については、拙論「T. S. エリオットの詩とヴィヴィアン・エリオット」を参考にしていることをお断りしたい。
7. エリオットと出会う前のヴィヴィアンの日記の内容から察すると、彼女はかなり神経質で、心配したり憂うつになったりするが、突然気分が変わって活気にあふれ、自分で説明ができないほどの上機嫌であった (Ackroyd 62)。

引用文献

- Ackroyd, Peter. *T. S. Eliot: A Life*. New York: Simon and Schuster, 1984.
- Aiken, Conrad. *Ushant: An Essay*. New York: Duell, Slogan and Pearce. 1952. Oxford: Oxford UP, 1971.
- Eliot, Charlotte Champe. *William Greenleaf Eliot: Minister, Educator, Philanthropist*. Boston: Houghton Mifflin, 1904.
- Eliot, T. S. “Tradition and the Individual Talent.” 1919. *The Sacred Wood: Essays on Poetry and Criticism*. 1920. London: Methuen, 1928. 47-59.
- . “The Influence of Landscape upon the Poet.” *Daedalus, Journal of the American Academy of Arts and Sciences* 89.2 (Spring 1960): 420-22.
- . “T. S. Eliot ... An Interview.” *Grantite Review* 24.3 (Election 1962): 16-20.
- . *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1969.
- . *The Letters of T. S. Eliot, Vol. 1, 1898-1922*. Ed. Valerie Eliot. London: Faber and Faber, 1988.
- Miller, James E., Jr. *T. S. Eliot's Personal Waste Land: Exorcism of the Demons*. 1977. U Park: Pennsylvania State UP, 1978.

- Pritchett, V. S. “‘Our Mr. Eliot’ Grows Younger.” *New York Times Magazine* (21 Sept. 1958): 15, 72-73.
- Russell, Bertrand. *The Autobiography of Bertrand Russell, 1914-1944*. 1968. London: George Allen and Unwin, 1978. 3vols. 1967-69.
- Schdder, Clara H. “In Memoriam: Mrs. Henry Ware Eliot.” Scrapbook of Mrs. Henry W. Eliot, Sr. Harvard U Library. Microreproduction Service, Widener Library. Cambridge.
- Shakespeare, William. *Romeo and Juliet*. *The Complete Works of Shakespeare*. 1905. Ed. W. J. Craig. London: Oxford UP, 1974. 764-94.
- Smidt, Kristian. *Poetry and Belief in the Work of T. S. Eliot*. 1949. London: Routledge and Kegan Paul, 1961.
- 古賀元章. 「T. S. エリオットの事実論についての序説」『比較文化研究』33 (1996): 60-69.
- . 「T. S. エリオットの詩とヴィヴィアン・エリオット」『言語文化学会論集』23 (2004): 241-57.
- . 「T. S. エリオットのエリート論と母親の優生思想」『比較文化研究』54 (2001): 47-55.
- . 『T. S. エリオットの詩の研究—円環のイメージから脱円環のイメージへ—』. 北九州: 大学出版, 2004.
- ダンテ・アリギエル. 『神曲』(カラー版世界文学全集第2集). 平川祐弘訳. 1968. 東京: 河出書房新社, 1973. 全50巻, 別巻2巻. 1966-70.